



(病床での彼の文字)

神学校で出会い、特別に親しくしていた友人が、直腸癌に侵され、1986年、48歳で召された。ある日、彼から癌に侵され、その癌は深く、残された時間は少ないと言われているという電話を受けた。私は、電話の前で号泣した。何度かお見舞いに行ったが、最後に行った時は、言葉が出せない状態であった。私はベッドの傍で「僕が死ぬ時、君に見舞いに来てもらえないね」と言った。すると、彼はサインペンを持って、そこにあった紙に震える手で「天国のドアマン」と書いてくれた。私が死んだ時には、天国のドアの前に立って、ドアを開いて待っていてくれるという。自分の死を目前にして、これだけのユーモアをもって、私を慰めてくれる友情に、心が震えた。

彼の前夜式で、私はヨハネ福音書3章30節の「あの方は栄え、わたしは衰えねばならない」という御言葉から、式辞を述べた。主イエスは、神の子であるから栄える。しかし、洗礼者ヨハネは人間であるから、衰え、空しく消えていく。彼と生前、「牧師たる者はこうだね」と話し合ったことがあった。そして、これが彼の生き方であった。

彼がくれた「天国のドアマン」という言葉は、私の中で何よりの宝になっている。私がどんなに間違い、どんなに悪に陥ろうとも、死んだ時は、彼が天国のドアを開いて待っていてくれる。この安心が私の支えであり、喜びであった。

昨年の暮、名古屋にお住まいだという方から、教会に電話があった。60歳代の女性で、教会役員、オルガニストとして奉仕している。彼女は高校生時代、東京の教会に通っていた。その時、教会学校の先生として熱心に教えてくれた神学生がいた。その先生にお会いしたいと、パソコンで調べていたら、私の「牧師室より」で名前を見つけた。そして「牧師室より」の筆者が「横浜港南台教会」の牧師であることが分かった。親しくしていた私に、先生のことをもっと聞きたいので、お訪ねしたい、と。

今年の春、教会に見えた。私は彼との神学校以来続いている友情について、彼の人柄について話した。彼女も、教会学校で熱心に教えた彼の思い出を、感謝を込めて話された。2~3時間、話し、名古屋に帰っていった。

彼の奉仕が、このように実っている。天国で、彼も喜んでいるだろう。今を誠実に生きる。そのことが、豊かな実りを約束する。本当に嬉しい出来事であった。